



大伴金道忠孝圖會

13
2692
11-1





浪華好華堂主人著編

同 柳齋重春畫圖

大伴金道忠孝圖會全十冊

浪華書肆

岡田羣玉堂

出田群鳳堂



序

曾視有天而有地有地而有人有人而
有田宅有田宅而有衣食有衣食而有
人怨有人怨而有亂臣賊子與忠臣孝
子之差別矣看来亂臣賊子之事橫
逆事篡奪其舉雖有大小久暫之殊
無不害於世者也是以天怒人惡終至
于喪身敗家覆宗絕祀之禍而已哉

大日本天武之朝有大友真鳥者起于
人臣之家而恃自己之武勇極力敢輕
天威竊謀不軌而羽翼大友皇子皇子
素魁岸奇偉風範弘深眼光精彩風
骨不凡天質明悟廣愛博士下筆成
章出言成文誰不服其浩學乎然而一
朝落大友真鳥之謀中終蓄窺窬
神器之志嗚呼可惜哉于此浪華之隱

士山田意齋子述一篇名曰大伴金道忠
孝圖會本末前後一見著然考古之者
可以為漢栢矣因黎東公世為書卷端
云

宮田南北識

青霞逸人書



おとものひろつぐのきょう
大友皇子像



としちのきょう
十市皇女像

大伴はさつな
あをたけりこたえり
いつれのつゆよいつちりせん

續人不知

反臣大友真鳥像



柳高堂画

宿禰金道像



上挺系傑
風骨あり
威稜を振
愛蔵軒
尤も諸
表字平人
忠者之儀
唐草屋

四



大伴金道忠孝圖會前編摠目錄

壹之卷

百濟豐璋乞援兵并輕大臣趣異國
 新羅王奸計輕大臣并響音應并圖
 宰相春衡說夢并春衡渡海百濟國
 燈臺鬼書詩歌并神鹿助孝子
 輕大臣燈臺鬼并其子春衡并遇詩歌
 以并身并的真愛秋心并告并る并圖
 觀音利益救難風并輕大臣并平并厄界島
 觀音の妙智力春衡父子并難風并救并ひ并ぬ并圖

二之卷

朝倉皇居造管百足伐神木
 勅詔并奉并く并百足人夫并勵并朝倉山の神木并伐并し并ぬ并圖
 天皇崩御并天智天皇御即位
 倭軍大戰唐軍并金烏百合推勇戰
 倭軍大ひ并新羅の兵并破并る并圖
 福信奇計新羅唐兵敗軍
 佐春衡唐將梅岸并戰并ぬ并圖并大伴金烏勇猛
 揚大人并擊殺并ぬ并圖
 新羅籠籠沙比岐怒城并穗積五百枝說密支
 倭軍攻沙比岐怒城

甲 百合稚弓勢孟黏と射圖

金鳥擊大虎并沙比岐怒江落城

高麗國の深山金鳥猛虎と擊殺と圖

豐璋帰國并田來津賞福信

倭軍帰朝并五百稚漂流別府篡逆

三之卷

豐璋奢移福臣諫言并執得説福臣

豐璋が媼酒に荒と患ひて福信大ひに諫奏とる圖

福信臨死大罵執得

新羅再犯百濟并枝市田來津戰死

枝市田來津新羅軍と惱陣死とる圖

甲 五百稚漂流孤島

五百稚海島小巨巖と射弓勢と示と圖

五百稚弓勢射赤熊

五百稚雪中教郎等と赤熊と射る圖

大友皇子密謀并賜諸將恩賞

垣雅明療春衡并月小夜懸想春衡同圖

金鳥嬖月小夜并妬婦謀棄艶書

四之卷

妬婦陷月小夜并去王山石疫死義

金鳥暴惡刑嬖妾并垣雅明恨金鳥

金鳥が残忍愛妾月小夜と蛇責にとる圖

のりあたるおれしや
雅明療牛尾兒并雅明仕金鳥
死靈殺妬婦并金鳥懸想嫂
妬婦ホ夜月小夜ガ忍魂入惱まざる圖
金鳥ガ毒計弒兄并龜山太臬討牛尾
奸計と肆りて金鳥其兄馬未田と毒害する圖
搦白蟲干女王告遠計
搦白蟲懐幼王去國并雅明會龜山
懐幼君白蟲夜城と踰る圖
雅明再仕金鳥并猪尾呵責芙蓉母子
芙蓉母子ガ危難異翁幼君ととくる圖
猪尾見怪夢并金鳥誤斬猪尾

龜山寄大伴吹負并靈狐報舊恩

五之卷

大友皇子金鳥賜并姓氏
大友皇子金鳥語并奇夢
大友皇子の見ゆひ并奇夢の中并勇士
日輪と棄并去國
金鳥生狼心并歸自國
便船と得并百合稚王從古郷に之る圖
百合稚飯國并別府陷謀被囚
唐櫃并匿とく并百合稚別府ととる圖
百合稚刑別府黒丸

大友皇子五大臣と不軌と謀りて圖
 大海人皇子遷吉野并蘇我赤兄説言
 大泉使吉野并大海人皇子御拔落
 大海人皇子の彈琴ふ感し天人影降并
 龜山太泉子と田舎女ふして吉野へ赴く圖
 矢背竈風呂并東國勢属大海人皇

摠目録畢

大伴金道忠孝圖會前編卷之壹

目錄

百濟豐璋乞援兵并輕大臣趣異國
 新羅王奸計輕大臣と郷音應図
 宰相春衡説夢并春衡渡海百濟國
 燈臺鬼書詩歌并神鹿助孝子
 輕大臣燈臺鬼とせれ其子春衡の遇詩歌と以く身
 の憂愁と告る圖
 觀音利益救難風并輕大臣卒鬼界島

觀音の妙智力春術父子が難風と救ひぬる圖



大伴金道忠孝圖會前編卷之壹

浪華 好華堂野亭考選

百濟豐璋と援兵 輕大臣赴異國

それ天の復所地乃載所孰の邦人倫無らん孰の州人道無らんや世
界萬國百般國風とある中にも亦る吾大日本秋津洲の白皇國ハ何れも
恐惶天津作の皇統連綿とら續三綱五常の政勢明正ある事敢て
異域の能及べ處小あはむ。され文國と稱する中華人も吾皇國と貴て
君子國と稱する。茲小人皇三十八代乃聖主齊明天皇の御宇小當て異邦
新羅の國王韓隆との者三韓 漸羅高麗 百濟 一圓小併吞せんとの望に起。中華
の王唐の高祖乃臣下小賄賂を賄り大軍を借て自國の兵と合し是を師と
先百濟國へ押寄諸城を攻伐し久々太平小居て武を志し百濟を

志も微勢あはれ其鋒先小當ふ。諸城悉く陥落し百濟王も遂小新羅
の手へ擒となり敵手の為小令と落し其太子豊璋のも虎口を免じて傳
國(逃渡)リシ。往古神功皇后三韓御征伐の由より以て新羅高麗
百濟も大日本の属國となり累年朝貢と献り臣と称する事あれども豊璋大
和國岡本の都(泰内)と國の變と紛(援)を乞ひたり天白王(高麗)の群
臣を召集て御評議有る小内大臣中臣鎌足公位階を進み出て中
新羅高麗百濟共小唇齒の國也。歡樂と相俱り患難と相濟(き
小新羅を教狼の心を逞ます。百濟國を攻伐國を害せし条其罪(重)く
む者(を)神國の兵と差向(出)璋と扶けて新羅を伐め奉るあれども如何小
せん先年蕪我入鹿父子王命小叛(を)逆(を)企(を)己(を)小(を)殊(を)伏(を)をもとの其
余黨(を)朝(を)家(を)の(を)隙(を)を(を)窺(を)ふ(を)ま(を)ず(を)だ(を)か(を)を(を)依(を)て(を)短(を)忽(を)兵(を)馬(を)と(を)遠(を)く(を)異(を)言(を)を

むけ向のんを遠(を)慮(を)あれ(を)似(を)たり。然(を)も(を)豊(を)璋(を)が(を)教(を)奏(を)ゆ(を)き(を)黙(を)止(を)ら(を)る(を)臣(を)が
浅慮(を)を以(を)て(を)も(を)る(を)時(を)に(を)才(を)弁(を)相(を)兼(を)人(を)を(を)擇(を)む(を)新(を)羅(を)へ(を)勅(を)使(を)と(を)彼(を)國(を)遣(を)り
新羅(を)小(を)利(を)害(を)と(を)説(を)て(を)百(を)倫(を)新(を)羅(を)の(を)和(を)睦(を)と(を)執(を)針(を)せ(を)新(を)羅(を)へ(を)犯(を)り(を)取(を)る(を)地(を)を
悉く(を)百(を)濟(を)へ(を)返(を)さ(を)ら(を)ば(を)然(を)と(を)豊(を)璋(を)と(を)百(を)濟(を)王(を)小(を)封(を)り(を)是(を)兩(を)全(を)の(を)策(を)あり(を)ん(を)か
彼(を)新(を)羅(を)も(を)吾(を)皇(を)帝(を)の(を)勅(を)命(を)と(を)拒(を)む(を)後(を)日(を)の(を)然(を)大(を)害(を)と(を)あ(を)ん(を)妻(を)と(を)恐(を)む(を)と(を)犯(を)せ(を)り
地(を)と(を)百(を)濟(を)へ(を)返(を)す(を)自(を)國(を)へ(を)引(を)退(を)れ(を)ん(を)若(を)皇(を)國(を)の(を)詔(を)令(を)小(を)背(を)れ(を)猶(を)貪(を)負(を)戻(を)の(を)心(を)と
肆(を)せ(を)む(を)其(を)時(を)西(を)海(を)南(を)海(を)兩(を)道(を)の(を)緒(を)將(を)詔(を)あり(を)て(を)新(を)羅(を)を(を)攻(を)伐(を)り(を)ん(を)ん(を)
猶(を)此(を)上(を)策(を)あり(を)ん(を)腹(を)藏(を)せ(を)と(を)迷(を)ら(を)る(を)事(を)と(を)有(を)れ(を)ば(を)天(を)皇(を)と(を)首(を)を(を)り(を)滿(を)座(を)
の(を)卿(を)相(を)あ(を)り(を)感(を)稱(を)あり(を)ん(を)實(を)も(を)内(を)大(を)臣(を)の(を)高(を)論(を)と(を)理(を)の(を)至(を)極(を)なり(を)早(を)く(を)勅(を)使(を)小
を(を)遣(を)り(を)才(を)機(を)の(を)人(を)と(を)擇(を)む(を)事(を)と(を)一(を)齊(を)小(を)奏(を)用(を)せ(を)れ(を)る(を)事(を)と(を)帝(を)も(を)御(を)承(を)伏(を)
す(を)り(を)ん(を)然(を)も(を)其(を)和(を)議(を)と(を)執(を)針(を)を(を)智(を)能(を)弁(を)才(を)の(を)者(を)と(を)擇(を)む(を)ん(を)て(を)詔(を)令(を)下(を)す(を)ん(を)ひ

其日の評議一決して。月卿雲客皆退出致され。斯く緒臣下の中。小羅
異國(勅使小羅)を遣ふ。其人を擇ませ。小羅河内の小羅(大臣春光)に
聞え。小羅(普)倭漢の書籍小羅(眼)を肆し。頗る博聞ある上。弁舌(宰相)我子貢
おも劣る。小羅(能)弁多れ。今般の勅使。小羅(狂)春光を勝る者有る。小羅
と。衆議判の上。奏聞。小羅(及)び。小羅(狂)春光を彼土へ渡海せ。小羅
と。詔命下り。小羅(小)羅(公)奉。小羅(狂)春光を召寄。勅命を傳へ。小羅
小羅(大臣)大(小)悦び。朝廷の智臣多。小羅(中)小羅(愚)臣。御擇出。小羅(預)り。なる。小羅(家)
の名譽身の。面目何。小羅(是)小羅(過)小羅(を)小羅(て)飲。小羅(と)小羅(領)掌。小羅(退)出。小羅(私)
宅(飲)り。妻子小羅(勅)命の趣。小羅(を)言。聞。急。其。准。備。を。為。小羅(喜)の
色。面。小羅(頭)して。命。小羅(小)子。息。佐。宰相。春。衝。暫。考。て。父。小羅(向)小羅(今)度。の
勅使。小羅(擇)出。小羅(小)羅(名)譽。の。脚。使。小羅(も)熟。愚。案。を。聞。小羅(小)羅(新)羅(を)

異國の偏見。仁義を不知。蛮國ある。上當時の新羅王。貪んで飽事。小羅
無道の者。と言傳へ。然。我。父。彼。土。渡。小羅(羅)晋。張。儀。が。舌。と。借。て。利。害。を
説。く。小羅(も)恐。く。承。伏。せ。る。小羅(は)小羅(新)羅(王)勅。命。と。拒。て。從。は。ず。時。小羅(父)の。耻。辱
の。小羅(非)を。吾。皇。國。の。耻。と。り。小羅(を)小羅(此)度。の。擇。出。預。り。小羅(の)小羅(名)譽。小羅(似)て
禍。の。基。小羅(小)羅(願)小羅(疾)病。と。稱。し。御。辞。退。あ。り。小羅(と)小羅(練)々。小羅(今)室。も
と。小羅(小)今。宰相。の。練。々。と。心。ま。れ。小羅(異)國。へ。送。り。渡。り。小羅(小)羅(足)の。脚
使。小羅(勢)を。思。ひ。止。り。小羅(日)本。の内。小羅(小)羅(旅)路。と。小羅(憂)小羅(を)小羅(増)す
千里。を。隔。し。新。羅。百。濟。の。國。へ。年。番。し。却。身。小羅(行)る。古。卿。小羅(宰相)人。小羅
主。女。か。思。煩。何。と。小羅(侍)を。召。し。涙。と。俱。小羅(練)々。小羅(小)羅(春)光。大。小羅(氣)を。小羅
損。し。是。小羅(二)人。と。小羅(言)甲。斐。か。れ。小羅(余)小羅(我)身。不。肖。あ。れ。と。小羅(勅)命。と。奉。り。小羅
異國へ。渡。り。和。議。を。講。せ。ん。小羅(生)涯。の。面。目。な。り。新。羅。の。王。假。令。異。國。小羅(思)殘。思。の

者ありとも我天照太神の神威を首頂た三寸不爛の舌を以て利害を説
小何と説伏せんや。や事成どて身の禍を醸し屍を異國小肆すも
國の為君の為小捨る命何と惜む足ん武士の戦場小向ひて命と捨るも
ト理かり素素リ倫言汗の如し。出て再び及るるやハ且倫命と領掌あ
今更虚病小糸と辞退せし却て言を食の科と算られ一家滅亡の端と列出
と也毒血の事とやものか。散く小叱り懲りたを令室も春衝も再び練
人言もわく。心中の嗟嘆まゝ口と甜とど止ふる。臣大臣のさし出船乃
旅装と調へ更余く備り也。朝廷へ春内へ旅装調へ一旨と奏し々々
帝歡聞す。勅宣かへし新羅王へ賜る所の聘物と下し首尾
和義と調へ辰朝と命しと勅授なり。御暇を賜り。春光拜伏して
天恩を謝し。勅書聘物を携へて私邸小返り。妻女子親族と別離乃

酒を酌り。遂小袂を別ちて住列。都茂出城州山崎へ到り。爰より
船小乗。退風を待て。纜を解。古郷の河内と右手小見。波濤万里乃
羈旅乃空小を赴た々々

新羅王巧計陷輕大臣

斯て痘の大臣の船。數千里の海路。小明。暮。或時ハ風波荒れて肝を冷
或時ハ淋雨小遮られ。幾日港小宮船の磯路を通る。付古郷小残り。妻や
子小言傳。申入便ゆ。思と焦。時も有て。憂苦と俱小日と重。漸
く百倚の港小著。是より船を出て。旅館をとり。土地案内の譯官を以
て。風の動止と聞合さ。むる。其者。互。報。多。ハ。百。濟。王。滅。び。て。後。を
國郡悉く新羅へ犯り取。獨百濟の忠臣福臣とい者。新羅へ
降。遺塞の孤城小植。新羅大唐の大軍を度く。伐。惱。小。寄

人攻憚り此頃ハ城攻の軍議小日と送りゆり新羅王ハ大業禪寺とす
大寺を本陣ふせりとの義ふいと告ぐるふと。まを其新羅王の陣(到)と
和義と討る所とて先釋宣と使者とて彼本陣(差)向大日本皇帝乃勅
使駐大臣春光王命と奉つて此國(渡)海せり迎の官人を出せと云せ
る。新羅王是を聞て使者と待せ置唐朝より未だ加勢の大將三人任
雅相龐孝泰蘇定方ふと召招れ今日日本より俄小使者と差越ゆるハ
如何あると日趣めんを問ふ。任雅相曰是別の義ふあむと。新羅百濟高
麗とも往古日本の女日神功とやん余攻伐と言甲犯あり日本(降)泰一
年貢物を贈りし近年我唐小属し彼國(貢)物を贈らざるふより其
義とせん為の使者ある。元来新羅百濟高麗とも我國の地續れ
む日本(属)貢物と贈る理カ。其使者の首と斬て陣門小鼻自今以後

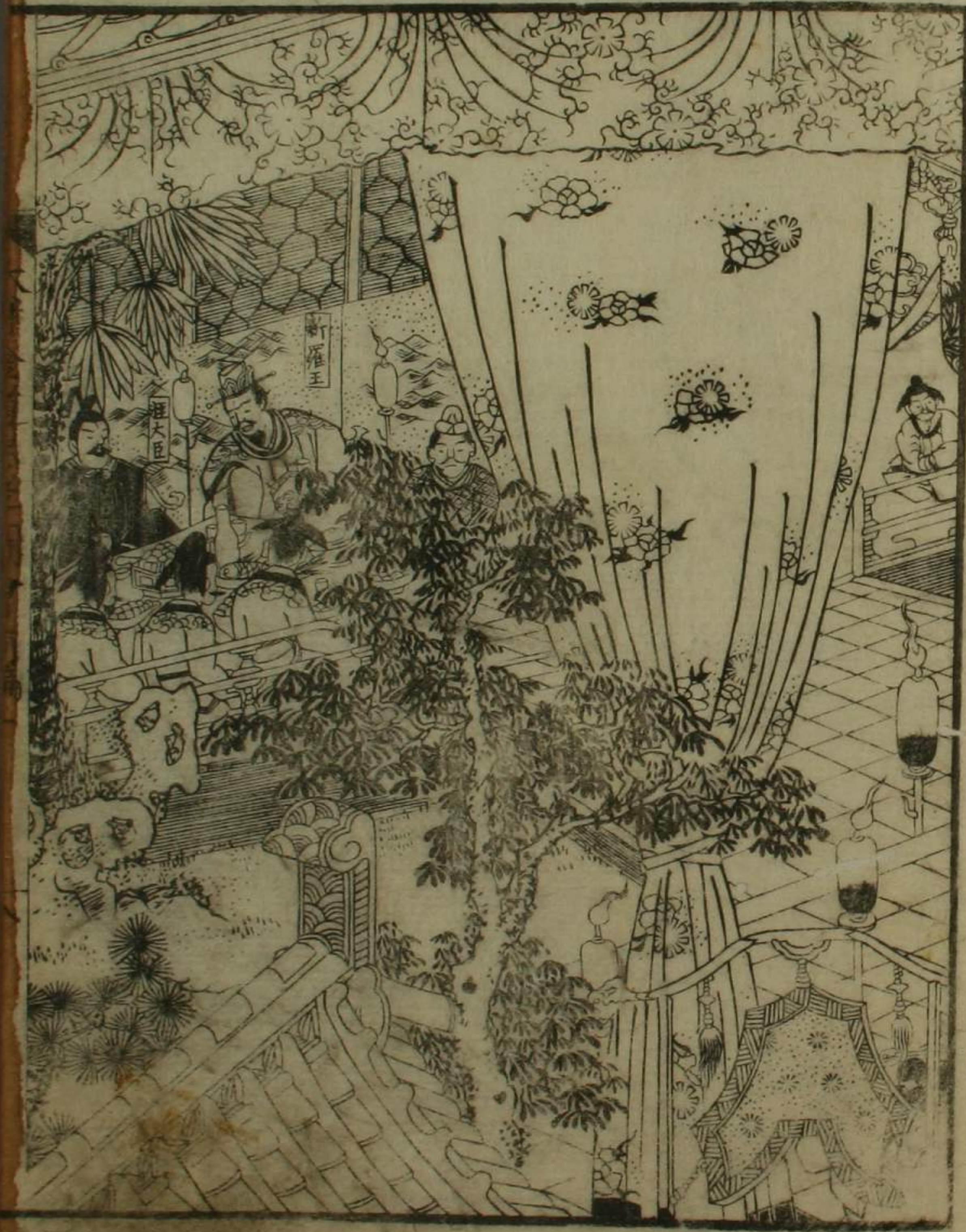
倭國(志)と通ざる者の誠とあを言と云々。小蘇定方曰雅相の論
一理ありとも。今使者の旨も聞む。倭忽く是が首と刻ふと原来殺
伐短慮の日本人怒を發して攻来るまおわらば。是の時百濟の殘將福信
日本勢と謀と合。我軍と内外より伐んと命。左有て合戦難義小及ん
く。依て我慮り我回とふ。先詐つて日本乃使者とて迎(入)徒者俱小擒と
ふて獄中小繫置。置して火急小福信が籠る城を攻落。百濟國と四
小平釣して後日本の使者と誅する。上策かる。と云々。新羅王韓
隆手と拍て大悦。蘇將軍の高論甚だ妙なり。我又日本の使者と云々
方便あると。酒食と饌て三將と置侍。侍待せ置る日本(の)使者と云々
て迎の者と出。なると言せ。腹心の者小密意を言。言て
そ遣り。其者日勢と連。連。倭臣が終。終。到り。新羅王より乃迎

昔と慰勸不述て迎々々々大臣新羅王が奸計と由まむむ。実小日本乃
威小恐して迎ると心得衣冠を正し徒者を引具して大乘禪寺を起す
斯て迎の者大臣と結して客殿へ入り小頓て新羅王衣冠を殺して立出
故意禮を厚じて拜謁し。譯者をして以て長途の海路渡海の勞を謝し。日
本王の詔命何妻小ゆやと問。桓大臣其時日本天子の勅書と捧て讀聞せ
且下賜る所の聘物と新羅王小文へ儲笏と正して曰。此度吾大君臣を
此國へ來せり。旨趣と已不宣命小載の如く。倫言の如く。先達て百濟王乃
太子豊璋吾日本へ來り。天皇へ奏聞し。多々新羅王韓隆隣國乃因身
を止し。唐朝へ加勢と乞て不意小百濟國へ攻來り。郡縣を犯し掠め利
又王を宥せり。何年豊璋が孤獨を隣國一臂の力を扶る。倭軍と以て
新羅王と伐仇と復させり。是小依て吾皇帝。延麟し。く。元來

新羅高麗百濟とも神功皇后の神武小依し。永く日本の臣とすべしと盟書と
捧げ歳々々々朝貢と献じ。近年新羅の貢物を献らむ。是小依て
疾より神兵を差向其罪と糾し。人獻慮ある処小今般々唇齒乃國の
因と破り百濟國と攻伐して國王を殺害せし。條命以て其罪。延々日本
の大軍と差向し。小朝貢と心慢の罪と責。二小豊璋が仇と復さん。為
新羅を攻伐有る。黎民の塗炭小苦ん。と隣り。小
り。新羅王先非と改め。百濟小犯せる地と返て。豊璋と和睦し。日本天
子へ朝貢と心。罪と謝し。後來貢物と絶。と献る。小神文と呈す。小於
て。其罪と。小。眼前の小利。小。心止む。勅直
小背く者。小。不日小神國の勇兵と以て。新羅國と攻伐九族と亡し。小
と乃義なり。宜く三思と。勅命小。小。小。流氷

のてく半句も淀まは噴舌くれば譯官も其能弁之感新羅王も其言と
ど告る韓隆心中の嘲を以て面ふに色となり緘小日本皇帝の倭惠
を承けおられ諸臣も言聞し其上で勅答するなり。數千里乃海路
成渡りぬり船中の爵と散らぬる野酒一献きりぬり其間小商
議となりぬりを席に退き頓て不皿盤を運び出させ種々の苦皿山海
の珍味を感陳て大臣及び從者小酒を勧め文武小秀る書生を出して
筆談などさせ春光の筆計と勢おもあふ。実意の御食應
と心成ゆり唐土の珍鏡和國の奇結を筆談して問答の不皿の献酬も
くして大不興を催しぬり其日も己小暮て銀燭數多點し多死も
尺其のてく暉し十余人の美婦琵琶笛鼓等と乃出歌舞吹彈を
奏して奥を副するも大臣愈歡喜百念と心て樂する所小新羅王美

人小白銀の瓶を携りて出て出まの座小着て大臣小向ひ此一瓶中華より得る
仙方の茶酒して諸毒と解し毎病長壽ありむる靈藥あり邂逅の珍客
小勸りも人爲秘貯し取取出しぬり一盞傾けぬり先試毒しと献しと
紫系玉の觴小半酌引受て飲干大臣さくく春光其厚意を謝して
觴を把滿くと受て飲味小香氣高く味甘美あり斐限おれぬり舌で鳴
して称美し觴と書生さくく大不悦ひ貴客の光臨小依て小生さくく
玉液を拜味する斐生涯の大幸あり是も半酌許受て飲干く新羅
王酌婦小指揮と大臣が從者們も皆盃を叩て飲しぬり倭人悦み
て各盃で飲干其味ひの勝る成續美する内大臣忽ち苦と叫び胸を
抑て仰ふ小も駭し鮮血を吐同苦む小一人の從者大不驚罵るに奇人
とて是も一声叫び尻居小小吐血と同絶と是と先とて一座の倭



人悉く血を吐席中の阿乱と苦むる。是新羅王の謀計にて彼銀瓶乃酒
の内を啞薬を加へれば是と呑首舌縮して言結能くを啞となる。太毒酒
かり然も新羅王及び其の者毒と解する事と定ふ服せ及異國の者
一人も毒酒中さるへ新羅王大臣以下毒酒中と見て手と拍て大
に愚昧の倭人原我が謀畧中りたるを愉快たれ。正使わ我別用
る処あり。其他の者どもを采り殺害し屍を野外に捨其餘の雜人船に残
者も一人も餘さず屠殺し船を焼捨ると下知を傳ふ。悲情殘忍の
新羅我々命不應と席上小侍も阿る倭人們を采り斬殺したるを
慙ある。狂の大臣の眼の明少と是とると至一身猶毒酒の為小酔痺れ
動く。隻能く舌を急言結し能く眼を從者のく屠殺せ
ると徒ら居る心の裡如何をう恐る。朽骨も有ると思ひやれ。

かり。是き鬼畜の所業ある。小供待て居る大臣が下部の者も多人數を
以て皆殺害し。猶港に船を残る水主揖取らる。追殘も屠殺
し船を焼捨ると言結し絶せ。惡業なり。

宰相春衝説夢 并 春衝渡海百濟國

且説暹羅大臣春光の子息宰相春衝は父が唐使となりて出船せし後母
と俱く河内の領地に留りて在るが父大臣の身上と思ひ煩ひ
日圓平岡の春日明神小祈願とて可憐又春光首尾より新羅百倫の和
義と執針の毒難小飯朝あぐりめを祈ね日ひまうりたる。或夜の夢に所平
岡の春日明神の社壇に糸籠り例のく又の飯朝を一心小祈り居る。小頼小
眠りと催したる。又暫く間眠る。心二頭の惡虎何國よりともあつて出
りて春衝が手の左右の大指と啗切。思ひ愕然として夢覺身を常

乃私房の机乃も不在。春衝溜息と吐借ハ社擅小忝龍一惡虎の爲小左
右の大指と啗切まーと思ひの夢みて有ると。心と安介多々か姪ハ夢中
啗切まーと思ひ。左右の手乃大指猶憶くと痛あるふど。心中小絞りふ
母小結を女心小うけのふん。心小秘して口外せざりたり。然小其翌朝小春
衝が母例より早く起出我子と呼寄て語りたるハ妻此曉小怪一死夢を
んん。其様ハ我夫にも瘦衰現世の人ももんえざる次女也。何困よりとも
なく心然と妻が枕頭小あり多の洞びぐる声音も。我過つて你や春衝が
練言を用ひて身の文学と憑て遠く百滴の困(勅使小大いなる災害を
此我り禍ハを衆人小及一我身ハ今生と需まじも生と得む。死と需まじも死
を得む。佛經小所謂地獄の罪人とりとも我が今の苦専心小ハ勝をうると
雨くと泣く。一妻夢心小悲しといもん方なく。其を何故さむの百定苦小

遭りてや。さああれを六館(飯り更)を深く思ひおきよとついで脚袖小
付し其袖裂ちたましとて夢覚る思む最忌り死夢からや
我夫の御身凶事ある兆ふて右より泣くと心安らば其ふたりと涙さぐと
問々る小と春衝心中小甚と姪。昨日我見一夢不祥なる事今も母の夢
語と皮む最も不吉あり。父の安否と心むとふれと思ひおる。其色も願
ふ。故意微笑して曰何とさまで心頭小憂の程のよのいづれ縋小も慈々を
五臓の煩ひより入ると如く我母且夕小我父の妻と思ひ續けのふより。かる
夢をもんふたり。抑夢小六の品有て周禮と書小占夢乃官とて
夢判の官と殺け六の夢乃吉凶を占せり。載れども猶信が
た所の先六夢と中ハ小正夢。二小愕夢。三小思夢。四小覚夢。五小
喜夢。六小懼夢。是なり第一の正夢と中ハ所謂正夢。不て魂靜小

正しぬ時天地神明の夷と告ぐ夢なり。昔殷の湯王天帝より良弼と
賜ふると夢々々傳説を得周の文王飛熊幕小入と夢々々大公望
を得る類なり。二小愕夢と心小愕く有りて見る夢とて文王病瘼
と死其子武王心愕き是と案下煩ひ小天帝文王九年の齡ひ増
与へぬと見夢の類なり。二小思夢と心小思小夷をみる夢とて孔子
平日小周公且を思慕ひ屢周公と夢小見類して母の見る夢も
即ち思夢とて四小寤夢と心小寐する内小我言たる夷と寢て夢小
見るより晋の孤突が太子申生の事とて其夜申生を夢小見
類なり。五小喜夢と心小喜と有りて夢小見るより漢の文帝の黃
頭郎が我を推て天へ昇ると夢小見類なり。六小懼夢と心小懼と
夷ある時小見る夢とて漢の光武帝が龍小見ふて天へ昇ると夢小見

て驚愕類なり。六夢の中。正夢の靈ある夢とて其餘の五夢
と我心の動く所より見る夢とて吉凶小拘るより一。只愚昧の者ハ心中の
迷ひ種々の夢を或ハ喜び或ハ懼とも其途ある小あざむ故小古
より愚人の面前小夢と説ありとて戒めて俗言小夢ハ逆夢とせ
む却て我父の難小飯朔去る小兆小てやい布えと母の心と安くと
とめ喻を奉て練り多れ母もさる夷も有る小やと少ハ心と安くと
ども左右小就て夫の安否を心頭小掛且夕々よくと思ひ煩ひ遂小病と生
ト始々仮初のく打目多る日我退て疾病なる飲食も進を頼り
なくんえんが春衝大ハ心を苦し普く都鄙小良醫を尋て未だ其
身の衣帯と解と晝夜側を去と看病ハ心中小ハ神佛小祈誓し母の
病の平愈せんを祈り多れと天數已小尽くたる小や露路をより乃論申す

漸く小衰へ弱りて春衝と枕頭小招丸枯野乃虫より少死声して言
々るの妾が病已小迫りて生る道有るやと覚と今小あれ草葉の
露と消果あむ野送の更を瘰く疎りて你身ハ疾く百濟園へ渡り我
夫の安否を訪ひ一日も早く日本へ伴ひ皈りぬと云ふ女が小佛と
造り僧と供養するより遥小勝し退善なり世の教小親の喪小籠を
孝の道なりと魚你身ハ夫と表裏小て喪小竜と不孝と心得ぬよと
息もさぐ小遺言に春衝母の心中に推量り哀涙小膝を沾り
が故意詞を励まし其の心弱れ仰ごう味ハ毒と勉て飲食自
然医薬も効と奏し病忘りぬるや又の事との思ひ屈ぬかゆ心
地死ぬる思食あれぬ又の更ハ春衝小任せぬひて心長閑小保養小
身と練めぬる母ハ只弱り小弱り瘵飲心下小迫り只出る息の小て

終小其夜の曉小芙蓉の客と成るる哀なる春衝ハ天小悲心地小歎
れぬるも起死回生の仙丹もあられぬ絶をなれ方便もなれ只愁涙小袖を
絞り多と郎黨岩彦と云る者主と練め今ハ如何悔と歎死も其
詮有るを言ふと御縁射の人小も告知の野葬の宮と成ぬる
命と云々る小と春衝と涙を止め親類着族の絆ハ母の命終を告
あせ一門寄聚て善提寺へ送り埋葬して塚の主と佛妻作善残る
所なく宮と成るが春衝中陰の喪小竜てつと先頃乃夢の占と考り
小悪虎の為小左右の半乃大指と咬切まると夢をより幾程もた
我母疾小深ゆひて死没りぬ是右の手の大指と咬取り小應せり凡
慮の疑惑あが身と以て慮む又の存亡と心ゆとあられ殊更母が未
期の遺言も黙止が行時も早く百濟園へ渡海し又の安危を訪ん

大正十一年三月三日

とみと山彦小意中と明し其身ハ忌服の穢ある故俾ては寮の朋友素
の足躬と人ヲ頼み中臣鎌足公不就て百濟國へ渡海の義と願ふも鎌
足公も狂春光が久く飯朝せざる不審思ひ折あるも其の序小帝
へ春衝が願の趣を奏聞去りし主上も春光の消息たれど如何の
義し思食春衝の願ハを勅許たり是亦依て鎌足公宮中と罷出る
ハ足躬と以て春衝へ百濟國渡海の義勅免ある間急だ彼土へ渡り春
光が飯朝廷引の巨細を問ひ且彼地の動靜福信が存亡も見聞
て飯朝と會し幸ふ此頃百済の太子豊璋が安否と訪ふと彼土へ渡
海せし船津國川尻小右ありあれ其船小便船して百濟國へ渡海せし
下知を傳らん春衝大少悦び異國渡海勅免と蒙る是亦亦彼
土へ渡るる便船を得る是天道の扶ふ所也且ハ吾幸渴仰し

つる春日大明神の御加護なる所とて平國の方と遙拜し足躬が深情
を厚く謝し旅装と調へて留守の吏ハ親族小頼とみ岩彦と只入津
國川尻小到り鎌足公の命と傳へて百濟の船小便船と乞ふ船子小敬
んで領掌し春衝主役を奉て纜と解川尻と出帆し此船中小釋官
もまゝ故春衝幸の吏よと彼土の言語を習ひ且ハ福信が安否を
問小釋者語りたるハ福信將軍ハ智謀武勇兼備せ入して楯籠る城
要害堅固なる上兵糧乏しく部下の將率も勇壯小主將乃號
令を能守り新羅大唐の大軍と怖む敵手段と変て攻むる城兵も
防禦の術を變て伐碎るも大軍も攻徳此頃ハ攻口を退れ遠巻
て日を送りぬ是城中の兵糧乃尽る候待たる所也新羅王韓隆ハ疾を
王城の大兼禪寺と本陣とく多分城の攻口を退れ後ハ又彼寺或本陣とせり

まれば軍戦皆く止しと以て。福信將軍我々の命に倭國小客居まの無
璋太子の安否と紡せりなりと。微細小語りたる小春衝あはれり百
國の動静と知一日も早く彼國小渡り又の安危を聞んと只速小着岸せん
とど神佛小祈りたる

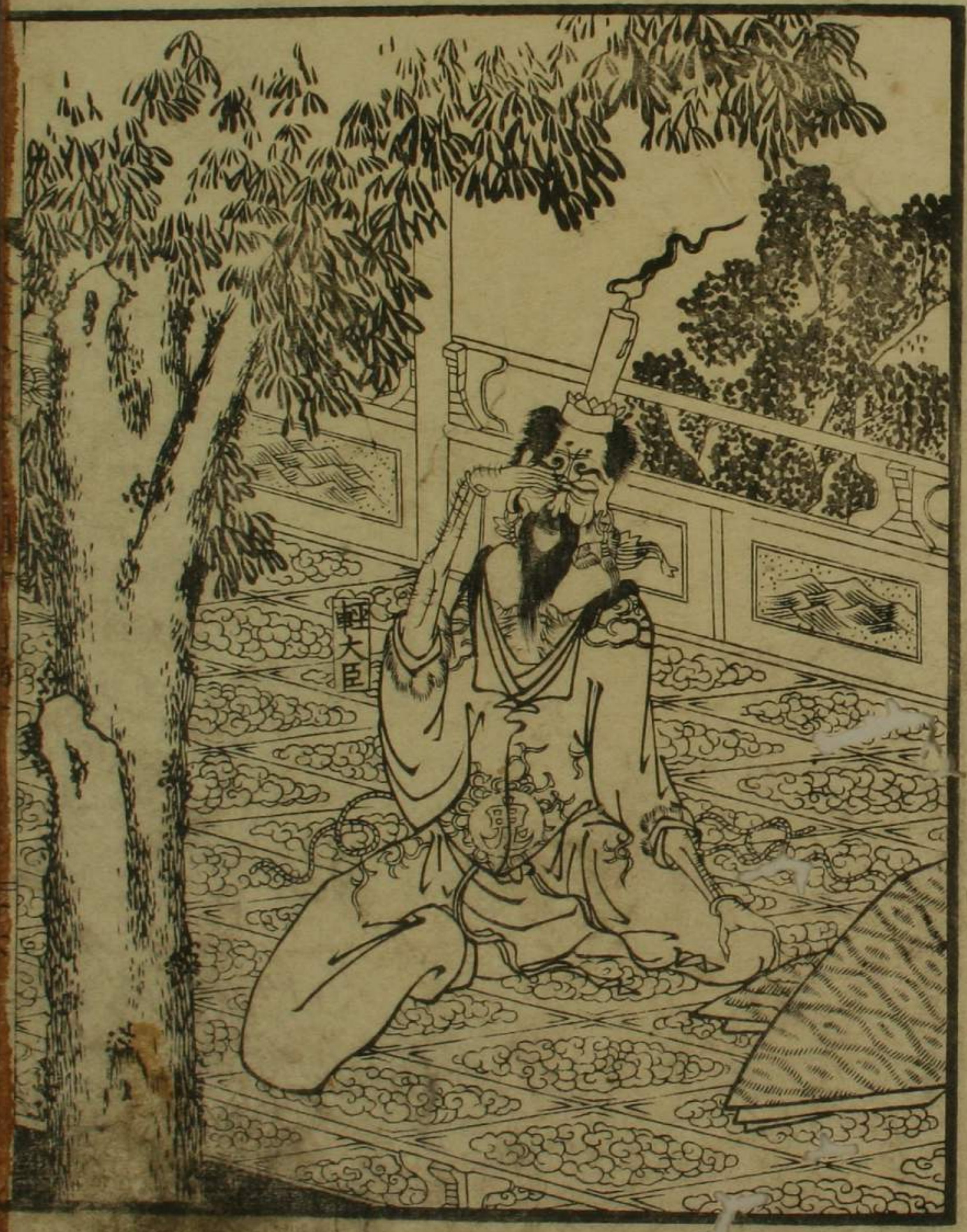
燈臺鬼書詩歌 神鹿助孝子

斯て春衝至後百餘人同船。万里の波濤を凌ぎ渡る程小沖津汝
風荒る日波瀾乃中小魂を消し。不知荒磯小行暮て鯨鯢の栖小抗を
傾け肌を穿つ夜半の風耳を疾くを浪の音小寝覚ちなる終夜或時を
生死不定の又の身上と案下煩ひ又或時を思愛死別の母を悼む我身の
薄命と悔み海路小漂ふ二月餘り十月の初旬小幸して百餘の港小ど者
岸に春衝至後初て心を安んじ百餘人小便船の思と厚く謝し下官一

人を借て引路者。船を下て至城へ到る小家の建き草木まで目おれぬ
妻の思ふて思ふ身あを心慰む。岩と結り合つて往て
大乘禪寺小著多し。是より引路の者と皎とせつ。寺の体をる小門堀
高く建陳堀の外。面小深た堀を湛へ流る水藍より青く。門前小廣た
石橋と掛り。是を渡りて寺内へ入を。廣くとて廣紅斐限なく杏前面小
大いなる唐門あり。進み近着て見る小草蒼鳥歎種々の彫刻工致凝し
主後此唐門乃内へ入る所。心ち二十人許の監卒。皆手小長た棒を握り
弛来りて。主後を取圍て一連小立塞り。眼を怒り。罵ると喧く罵り
春衝ハ船中。此國の結を習ひ。寛く。唐音を倭國よりの使若く山を
告ると。監卒們敢て省さ。猶喧く。旬る所へ入の官人。走り来りて
衆人を制し。監卒們よく棍を把整て。地小空を鳴と鎮て。お官

人ハ釋者也あり有まこと倭語ことばして言い々々ハみ你們ハ何國の者もれ我大王乃薄入ん
ととるやと答々々春衝早釋者あるを知ちて先首と低れをなり我ハ日本天
子の詔命を奉りて此國勅使小卒佐宰相春衝と呼る者なり先此
國渡海せ狂大臣春光久此國不留りて飯朝せると以て再び我こし
城の者なり先彼大臣小對面せられよと言々々官人曰然を大王小其首と
告令と受て後左右も良少時是小在て我再び來るよと待まよとて身
と翻して去去るが半時をり過て出來りて曰倭國の使も通さすよ
王命なり然れも後者ハ通る更と許さと只独身小我小隨ひ來る等とり小
と春衝岩彦を門内小殘置彼者小後ひて往く寺内乃体とんる小堂塔
僧房魏くとて莊嚴華嚴眼と驚鳥と紅がり斯て殿宇小入幾間と廻り
客殿到る小官人指揮此所在て大王の出座を待命と言捨其

身ハ奥の方へ入る春衝ハ只一人客殿小在て人の來る我待つ二時余小
及命れも入由出來る者なり遠小暮果て席中暗かりるれも燈と點
とる者も多れハ春衝安小相違其各札を讀まとも奈何ともを命れ
中なり怒と抑て待居る所小廊下れる方より燈の光をとり衝く小
近く來る小諸ハ新羅王の出來るあれと火光の方と視中居る内小
燈燭已小近着る春衝何心か是とん小一人の官人頭小燈燭と頂き
き鬼形の者と率來りて春衝が面前小坐せり已ハ其終と入る春衝
孰然と此燭鬼をんれ髪と振乱首小鉄輪と頂れ其小蠟燭を立
面の色朱のと身ハ裸躰小腰小續鼻禪と著滿身丹青と以て彩り
描九兩手ハ後小縛り其形のも奇姪なり普通の者是とん小大小怖
怖をんれも春衝ハ原來智力勝ますのありす力量微小秀武藝也



輕大臣燈臺鬼と
 ちり我子春衛小對面して
 詩歌を詠ぶ身乃
 憂愁を告る岡

達し。武士あはれも頗る勇敢なる上又大臣か安否を見届を
遠く異國へ渡り更あはれ何ぞ斯斗の者小怖るを死心中嘲笑ひ新羅の
戎ども我と威し惑さんともかゝる異形の燭を以て嘲弄する者
と賓客の前へ出まが風あるごとく心小問心小答と猶燭鬼の面を瞬もせと
守り居る怪ふふ此燭鬼の春衝が面をつりぐとを両眼より涙を流し
る二條の泉のぞく。涙はるる声を護りて頻小泣く。啞の泣が如く。春衝心中
綯り渠何故か落涙し何故か泣きと不審の余に燭鬼に向ひ。とも你を
鬼畜う人類う。何を悲とて斯泣やと問われ。燭鬼ハ益悲哀の体で。身を
糸ぢ向て背を春衝が方へ向縛られ。両手と動るも。強く搦られ。只
十指の働くむらあり。是より先小春衝ハ何となく肉動れ胸が強た。今
燭鬼が背面小わると指と動ると見。是細く解得させよとの義あるなり

と覚り。其望小任せんとて搦し繩と解を。小も。堅く括り。それを容易解と
心苛て佩る太刀と抜けて繩と切解小又さよりて。小指の先と傷より
されも繩ハ切解を。燭鬼ハ居あよりて。春衝が着せ。白た紋紗乃直垂
の袖切傷。小指の血泣と以て何を書き。春衝つり。んれ七言律の詩
小く其筆法書風より。又春光が手跡小似れ。心小愕れ其詩と讀るふ
我元日本華京客
汝是一家同姓人
隔山隔海戀情辛
逐日馳思蘭菊親
形破他郷作燈鬼
争歸舊里寄此身
又一首の歌とも書副たり
と。の。灯の影まづ。け身あれ。も子と思ふ。周の悲。うらうら

春衝詩歌と續くと一篇として大不憚れ備へ我又おて在るるとて慌しく頭
の鉄輪と取のけとも何者のとらふか浅猿丸形小八為とひしや抱谷
て問も大臣一言も幾まる更能はむ指とてとさ教(只個)る言下位
乃ちかり春衝在ふおれと悲歎の裡小思ひ多し是言結を聞る言下位
以て父と啞とあしける異形の燈鬼となて嘲弄去るおれ是と以て思
回せむ亡母が見るひ夢小我父形ち憔悴して生と死とも生と得む死と
雷とも死と得むと結ひしと愛物語去るひ父が艱苦乃念遠く古
郷へ通ひ夢小託して身の横難を告ひひおこと此年月の千苦万勞如何許
懶くも毎念心おも思食えんと父を抱た血涙を流して悲とたるが又恥と心を取
整へ異垂獸心の賊王神國の勅使する我父を斯まで辱しめ嘲弄去るよ
我今踏みで父の仇成復さん易も父を捨置人を不孝なれを先父と救

て後左も右もせん中社わめとて泣伏又と左半の腕小搔抱く小え末小
兵の大臣日頃の憂苦小瘦衰ふれむ狂たす小兒の如くなる小就ても彼伯
愉ハ母が杖の力乃衰へ成々悲とと聞との増て況斯まで身の瘦細
の程辛苦と受のひ痛りさよと戀歎小腕も痺々許矢猛心も弱るるが
再び氣を勵し右手小燈残し蠟燭と持たれ来りて問毎と毎二毎三小走
り出幸じて外面へ出る更と得ず春衝高吉小岩彦在やと呼りゆれを
岩彦先刺より王の安危と心ゆき此遠と離御して窺ひ居る小今春
衝か呼声を聞唯と答て走り来りぬ春衝岩彦小向ひ是を我父なり
巨細言聞と不違ふし你ハ我父と肩進らせよ我父支拒む我原と切散して
路我聞く命と言せし言々る小ど岩彦行りおれに利さる鳴呼乃者
あれむ甲斐なく大目と背小肩程もわく大勢の士卒とも多く炬火と振照

劍と振戈を揚て置くと罵り群り来つて春衝主後ととり囲むる。春衝ハ
又を飽まで辱しゆれ怒氣胸小迫りたる折あれが大小怒り。岩彦續よと
り後佩る太刀と抜拵し前近付者と二刀小斬付し。續て又一人を梨割小
切下より新羅の兵とも此太刀風小驚たかぐ。敵只二人かりと慢りてや猶も
八方より突てくる。岩彦此者とも切散さんと思とも。大目と肩されかなく春
衝後より添えり。春衝ハ又小過ち有せと前後小氣を賦り又二人を斬り
落し名を我兵とも此猛威の恐怖し。八方へ乱と退きたる小と。春衝えりと岩
彦と俱小門の隙を以て弛到りる小。鎖して出たれやうなく。左右も内敵
卒又百人許炬火と暉。関を度て襲ひ来りね。今ハ翼共たてり。遁る小道不
く。春衝十針尽て斬死せん。と心と定めか。心中小祈念し。謹上再拜。春日大
明神可憐擁護の眸と垂る。我又と助と祈る。内小早敵卒群り来て

三方と取囲り鉄桶のくくあな。春衝主後三面六臂の神人なりとも。遁る
がと。いんえきりたり。出る小不測なる。あ多勢の敵卒。俄小崩を罵り。垂
たて粉くと乱る。ゆと。春衝も岩彦も。是ハ何人の援也と。縛りおが。こま在
む。小牛の如し。二頭の白鹿角を以て敵軍と突乱。或ハ角小引掛て。虚空へ刻
上劍戟とも。怖と。強怒。突小崩。手小群。小虎の荒る。が如く。小て。きりも
大勢の新羅の兵卒。二頭の鹿の為小強えられて。右往左往小乱。強だぬ。春
衝奇異の思は。儲ハ春日明神我を助る。ふと。信心肝小銘。いと頼母
し。思ふ所。小。二頭の鹿ハ敵と強敵。忽ち身と翻して。春衝主後の前。強。来
り。四足と折て。背と。向棄。と。教る。躰と。な。と。小。春衝大。小。悦。小。岩彦。小
又。大目と。肩。せ。あ。先。鹿の。背。乗。し。其。身。中。續。て。ゆ。り。と。ふ。た。れ。鹿。を。起。上
り。て。殆。も。奔。馬。の。が。く。強。卒。身。と。躍。り。て。二。丈。余。の。高。堀。と。圍。し。て。水。越。り

新羅の軍卒是を見て先にお懲む追角と口と開く一奇小地出我先おと
追蒐るる魚鹿の蒐行くと風よりも疾く早影ごも見えされを詮方なく
引返さる。且春衝主後ハ鹿の飛強る候尔夢路を行心地と何國とほ
て往ともあさる。只其蒐るふ任せたる。鹿ハ只官蒐ふりけて東雲の頃海濱
小到。此所おて脚と止めたる。二人とも鹿の背より下々る。鹿ハ忽ち三串乃
白幣と変じ。東の天へ飛去る。春衝是を見て愈春日明神の神護お
る。更と感悟。岩彦ととも幣帛の飛去。方を遙拜。免をぐら虎口
の難と免と悦び合ら。夜ハ仄くと明ふる。

観音利益救風難 輕大臣率鬼界嶋

斯て春衝ハ此地を何國の海濱おやと。其邊と見固る。此所彼所の岸小ま
く異國の船見えを。此所と猶百濟國の港おやと思ふ所。忽ち一艘の和國

船漕まりて岸の邊へ碇を入る。春衝大ふ力を得先声をかけ。其船
ハ和國の船と見たり。我ハ日本天子の詔命と奉りて百濟國渡海。彼國の
て新羅の賊乃為小襲る。此所まで遁と来たり。同郷の好意と以て其船使
船させり。やと乞ふを。船長と知り。船槽小出。其を危る。御更お
都人おを何苦う。便船して進を命と快く承りて。頭て碇と更上
船と岸漕寄る。春衝主從天の助と悦び。大臣小衣と着せ。抱と船乗せ
兩人乗移り。船長の厚情を謝し。且言多。先お告。如く新羅乃賊兵
追来。我ハ此船小在。更と知む。你们小災と及むを。疾此港へ漕去
よと命とる。船長が白此港ハ是高麗の釜山浦。百濟國ハ百余里の行程
茂隔。是追退来る。更ハ心と安ん。夕と以。春衝發。釜山浦
なり。やと。岩彦と面と見。神力擁護。依て一夜の中。百余里の長途へ。遍来

一更と深く心中不感慨一益神徳と尊と。又船長小向ひ你が此船何乃為小
くる異國の溪へ来れると向ふ船長答て我の緒國と廻りて交易するを
以て産業と折る此金山浦へ来り。異國の泊船と交易しん此度此
溪へ船を入己小交易と仕果しと風悪くて未だ倭國へ飲りしを先割上
と風整りしを今此港と出帆しんと。水手小傘と帆を揚させ金山浦
へ乗出する。時小岩彦春衝小向ひ賊軍小襲れ危急の時を向ふ
つる追もたぐ。巨細を承りしをいひしが。その御父君何ぞ斯浅猿き脚安と成む
ひ言語も更ふ叶せぬやと向ふれ。春衝涙と潜然と流し向ふと語
聞せんと思ひ一更よ我彼大乘禪寺の客殿へ到りたる小如此くの義たると
暮るまぐ待せて燈鬼と出せし。血書の詩歌して始り又なるを知扶て
寺外へ遁し出し。一五と語れ小岩彦と。船長水手揖取し。追

新羅王が残忍暴悪と悪と大臣が憂苦と悼と嘆息せしと。又者も春衝ハ
憤り不堪む。新羅の方と睨て曰察する小彼新羅の賊王吾皇國を覆り性
ん。我又不啞まど吞り言語と止て燈鬼とたり。飽ちて日本と辱しや。社遺恨
なき。己よ我飲朝せむ帝小歎祈なり。和國の大軍と護り。新羅乃狗黨
を慶金小して此恨と暗まて止むと。拳と握り止齒を切て怒りるを理り
なり。斯て船子小揖とあやと帆と張て渺たる大洋とまきせ。稍日本乃
地方も迫りしと覚く。對馬の山幽くふんえたり。春衝は頼母し思ひたる
小。其日の嘯時より俄小風変り一天須更の内小大黑暗とかり。暴雨烈し降出
し。水手揖取大り。強だ急小帆を下んとあせし。風強く吹孕て下る更
能と。左右とも同小日暮果天小。雷電鳴。岡たて。船小高浪小。揺揚
られて天朝る。危む。又下り浪小。引連て。奈落へ没する。疑れ年月倫



舟小別る船子們は浪小酔て船底小岡伏ね増て舟船小別る春衝主役を
今や此船底の水層とわりあんと安んず心むかく大臣と懐抱て春日明神を祈念
とる絆たり然るふ此船の長八年來觀音大士と深く信仰しれを先より
心不乱小普門品と繰返りし高聲小續誦しるる其信心や通じらん或飄
流巨海龍魚諸鬼難念彼觀音力波浪不能没の文と痛む時由忍ち
陸の方小あつて一点の灯の光現しなるぞ不思議なりなる船長是を見たり
大い悦び浪波彼火影と目當小楫を取よと呼りしれ水手も大い力を得
氣と励まし合楫をとつて船をまきと程小雷雨漸く小止風もわり船穩小走
りて一箇の磯山小乗著るる春衝も舟船中の諸人撫生し思ひをわ磯の
樹木小綱と結結碇と下しと始て吻と息と吐互小毎更とど悦び合々る松小
彼灯影ハ何時の程消矢て空小星乃と見えたるふぞ緒人奇異の思ひは

々の船長小經卷と數度并頂是是偏小觀世音菩薩の助け多所を感小
此菩薩の利益廣大なる変限なく周の穆王乃慈重小普門品の妙文ハ
中慈眼視衆生福聚海無量の二百の偈を授りて饜ある南陽の徹縣
山小入々餓む七百歳の齡を保ち涼州の徐曲六千千眼の觀音大士の像
を描て地獄へ墮し又母と救ひしとや我も年頃彼菩薩と念しより一度
必死の病難と免れ一度の路上小忍賊の難を免れ今や風波の大難を免
れし春あきよ你們も信心小念しなれと言諭しなれ水手楫取とも皆合
掌し異口同音小南無大慈大悲觀世音菩薩と唱へる春衝も深く感
し俱小各号と唱て船長小向小誠小你が信心の徳小依て我們又子主從小大
尼難と免れし神佛とも小疑念なく心小信しなれ小應驗著明して御音の物
小應むるが如し我百濟國小於て春日大明神の擁護小倚て万死の中小一生と

得今ま観音大士の大慈悲にて鯨鯢の餌とかり更と免まじりし神佛と
水波の隔乃何と云信ぜざるを免れりて観音薩摩一切衆生を利益
の緒の横難と免まじりし普門品も咒咀毒茶所欲害身者念
彼觀音力還著於本人と鏡見我及毒茶の爲小言語を聞らば災難
を救せりし船長所持の経巻を借て信心を凝續誦して一心祈
念する斯て夜ハ明日よりなれども暴風吹荒て高浪岸の崖と碎り
かれ船と出とるれやなく此嶋小船がらて風の風を待てる春衝ハ
帰心矢の如早く都へ歸りし思とも風悪れを奈何とも可爲やうなる
ふても此嶋と日本の地が異國と心訝り又大臣と岩彦ふ病させ其身
を船より下て陸地を東西南北と廻りてふ人家へ更ふなく峻絶と聳へ
る高山小煙火天と衝て立登る所幾処ともなく其音雷霆乃更く

如或ハ瓦落くと凄れ音と山谷も山崩ると疑れ更ふ倭國とも重國
とも知れぬ此山の溪間より人の賤の男鉄の柄小袋り物と掛て突た
て出来たり春衝声をけ此嶋ハ日本の地が異國と問われ彼者春衝
が爲射とまじりてとて答曰此地ハ薩摩の國乃離嶋にて硫黄が嶋と
呼の更ふ人の通來る所ありぬ何ゆふる嶋とまじりやと不審なる
わど春衝薩摩の國と聞て先士の心と安んて曰我が都より百濟國へ君乃
御使不行者か難風不遭て此嶋へ漂ひ着たり此嶋ハ人家有やと問
彼者首と揮て曰否此嶋ハ人を住いぬ我ハ薩摩の浦端の者にて平日を
沖小出て漁りしも若海荒て漁の多れ時ハ此嶋へ來りて山路の硫黄を取
産業の扶とかりあり此嶋ハ究て硫黄まじりる由ハ硫黄が嶋と呼名を付
たり昨日より風強く沖荒て漁と爲れぬ硫黄と取小渡りしと言捨て

往去々々。然る所小船子一人まを來り。疾く御方のいとも。心げあえり。小
より。病去り。人の頼り。所々。尋ひひき。疾く。疾く。春衝。疾く
船子と俱小歩と逸りて。船。舳り。又の体。大具。呻吟。声。苦。げ。喘
死。居。多。と。岩。彦。其。背。と。撞。居。り。春衝。又の耳。小。口。せ。春衝。是。小。と。脚
心地。如何。い。と。言。大。目。眼。と。開。れて。春衝。の。面。と。見。陸。と。指。ぎ。頻。小。サ
と。い。と。聞。春衝。覺。り。是。陸。下。と。思。ひ。身。あ。め。と。岩。彦。と。俱。抱。き
う。て。船。より。下。し。樹。下。小。竹。占。敷。て。居。々。小。大。具。居。あ。り。と。日。輪。と。拜。し。四
方。と。見。回。て。吻。と。息。吐。々。々。か。心。ち。苦。と。叫。び。て。多。く。血。と。吐。々。々。と。主。後。と。も
大。い。狭。た。左。右。と。必。抱。々。内。小。大。目。潤。々。々。を。殺。し。一。声。春衝。と。呼
々。々。春衝。再。び。驚。れ。我。又。言。結。々。々。と。得。身。い。り。脚。心。と。駭。と。持。身。と。力
と。副。々。と。大。目。涙。と。潜。々。と。流。し。我。悔。々。々。ハ。你。が。練。と。用。ひ。と。好。々。と。和。義。乃。勅

使。小。新。羅。王。小。欺。々。と。毒。酒。の。為。小。啞。と。なり。我。小。隨。從。せ。り。者。船。子。追
も。異。賊。の。為。小。屠。殺。せ。れ。我。ハ。鬼。類。の。形。小。摸。せ。れ。燈。燭。と。頂。て。燈。臺
鬼。と。呼。と。多。く。辱。と。蒙。り。已。小。異。國。の。怨。鬼。と。なる。魚。子。小。你。が。孝。小。依
て。異。國。の。死。地。を。去。更。と。得。今。已。小。日。本。の。地。へ。皈。り。生。前。の。本。懐。何。更。々
是。小。如。ん。然。る。今。朝。曉。の。夢。小。觀。音。施。無。畏。菩。薩。示。現。去。り。小。你。が。息
男。孝。心。深。く。我。小。祈。念。し。て。你。が。延。命。と。祈。し。と。も。前。生。の。惡。報。小。延。命。と
蒙。り。命。數。已。小。盡。れ。バ。我。方。使。小。其。壽。と。延。し。得。さ。と。も。能。家。と。僅。小。言。結
て。我。得。せ。む。命。と。告。め。と。思。ひ。命。覺。り。果。と。毒。酒。の。為。小。編。り。舌
伸。て。你。小。言。と。遺。と。更。偏。小。觀。自。在。菩。薩。の。長。怒。小。倚。り。教。小。田。水。及。た。余
我。存。余。て。都。小。飯。ら。と。何。の。顔。と。以。て。帝。と。い。ら。め。と。朝。廷。の。群。臣。小。見。小。命。入
され。ハ。此。嶋。小。て。命。終。せ。ん。と。我。幸。々。と。我。伎。小。燈。臺。鬼。と。呼。是。鬼。の。形。と。成

たゞ現世うら鬼畜界へ墮落せしめ我亡骸を此嶋小築集會より
の名と鬼界嶋と呼帝王の御使となりて新羅高麗百濟渡り或は遣唐
使となりて中華に到ん人の誠とを奪ひ是れ我耻辱と永く此嶋小築とふ似
ど異國へ渡海する人此嶋の名を聞て我不覺と取り更と思ひ身を慎み
害を防ぐ一助もせむ罪障消滅の因となり煩惱即菩提の果と結ぶ。你
君小忠勤を尽して父の過ちを償ひ家名を浄むるを佛像を造り浮屠
と建ふ小勝る孝養ふれ。喘ぎし此條の更と遺言。掌と令と船音の
室号と敷声唱へ一大息とと見え多々忍辱と眠がごとく息絶たり。岩
彦大不致歎悲をなれ。其甲斐有る更おれぬ遺言小すせ磯山の土
と堀穿ち死と埋葬し果たり是より以後此嶋を鬼界嶋と呼わ
る。彼船長も大臣の死没を聞て俱小哀涙袖とぬる。船子們と力を併と春

衝を埋葬と扶さる。斯て其羽目風順風吹整りし船長抗ひ纜を解
帆を曳揚て追風を孕せ海上を難小伊勢の津小着岸し春衝船長
が好意と深く謝し。囊中の砂金とて一別を告て船より下岩彦と後へ大和國
岡本の都なる内大臣鎌足公の館へを赴けける
因小曰源平盛衰記小俊寛僧都鬼界嶋遠流せし赦免小洩り彼
嶋小残り小俊寛が家の童有王丸鬼界嶋渡り僧都小回會一段小
狂の大目う燈臺鬼の故事と奉り是は薩大國の鬼界嶋の更とて小
肥前國長崎小鬼界嶋と離嶋ありて其嶋の佛堂小俊寛僧都の
木像あり又右王松と呼松も右と土人小聞り。此を鬼界嶋薩大と肥
前兩國小有何と是たる更と志す。後の君子身と結ひの巻

大伴金道忠孝圖會前編卷之壹畢

